

武蔵村山市立歴史民俗資料館報

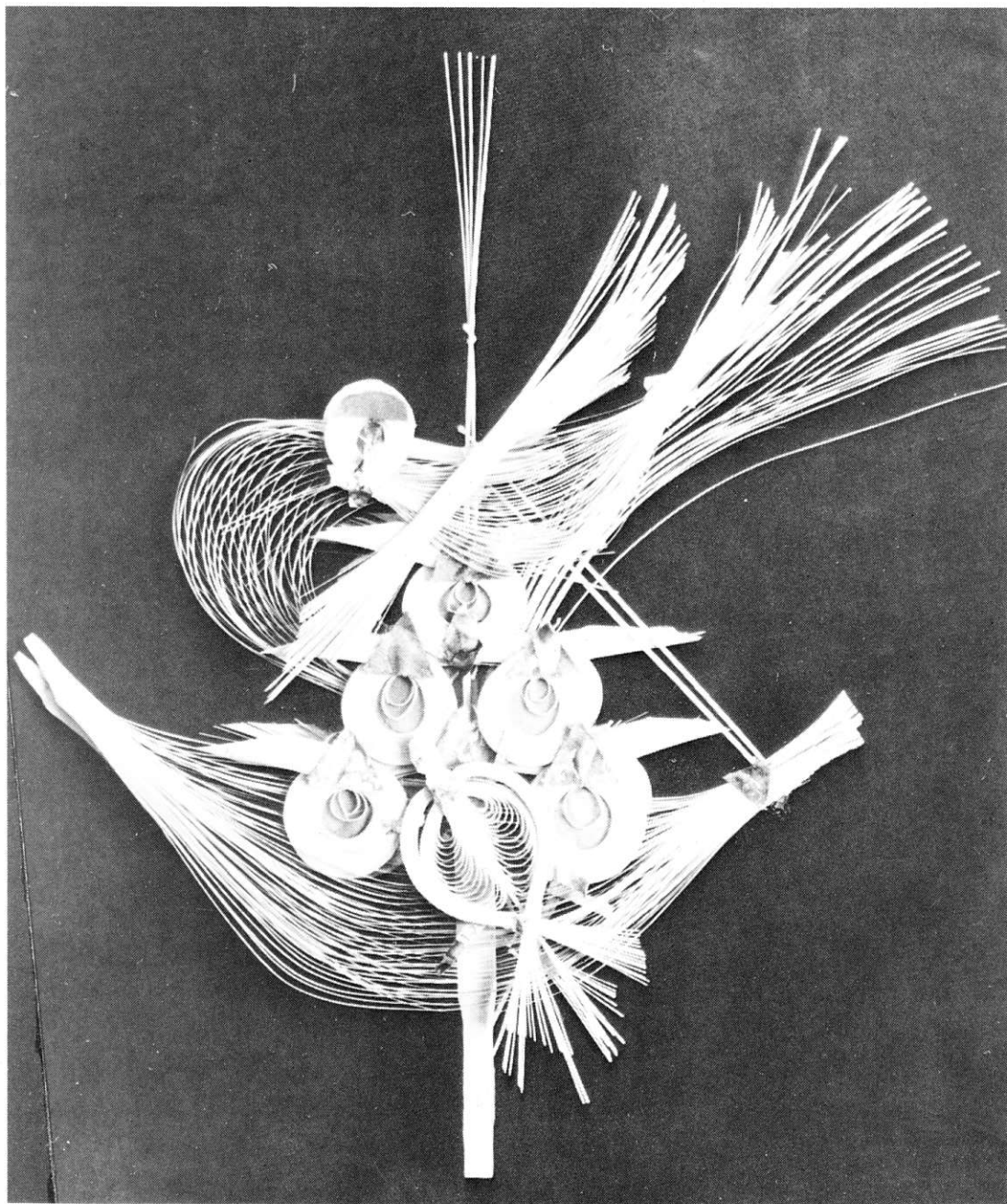
# 資料館だより

第 4 号

昭和60年 2月20日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市中藤6343 Tel 0425(60)6620



竹細工 神酒の口 (宝船)

タカラブネ

中藤 荻野清作氏作

## 武蔵村山市の庚申塔

現在、市内には21基の庚申塔が確認されております。このうち、すでに館報で6基の庚申塔を紹介しましたが、今回引き続き6基の庚申塔を紹介します。なお、分布図については、第2号の館報を参照してください。

### 宿・薬師堂の青面金剛塔（写真1 分布図No.4）

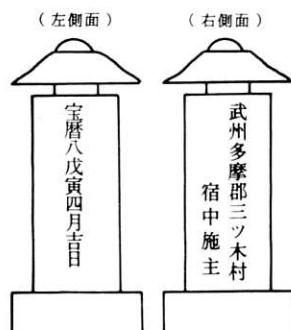
宿の薬師堂の境内には庚申塔のほか、明和二年の巡拝塔、寛政六年の馬頭観音、享和三年の石橋供養塔、明治六年のあたご大神碑などが並んでいる。

杉本林志著「百庚申巡礼記」に「第20番 三ツ木車井戸際 施主宿中宝暦八寅四月」とあるように、庚申塔は現在の三ツ木歩道橋南側の車井戸際にあったもので、昭和34年の青梅街道改修時に薬師堂に移されている。

この庚申塔は笠付の角柱状で、高さ125cm。上部に日月瑞雲、中央に合掌六手の青面金剛、下部に三猿が刻まれている。右側面に「武州多摩郡三ツ木村 宿中施主」、左側面に「宝暦八戌寅四月吉日」と刻まれている。



写真1 宿・薬師堂の青面金剛塔



### 後ヶ谷戸の青面金剛塔（写真2 分布図No.5）

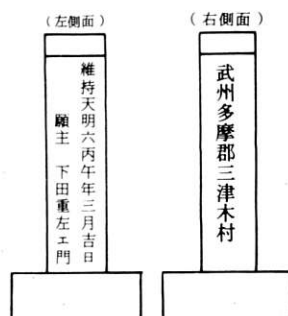
後ヶ谷戸通り三叉路の道端に庚申塔が建てられている。この庚申塔は高さ100cm、幅39cm、厚さ21cmの平柱状である。風化のため像容の形態がはっきりしないが、合掌六手の青面金剛が浮彫されており、下部には三猿が配されている。

塔の右側面には「武州多摩郡三津木 後谷戸中」と刻み、左側面には「維時天明六丙午年三月吉日 願主下田重左エ門」と刻んである。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第21番 同村後ヶ谷戸中程辻 天明六丙午年三月下田氏」と記されている。



写真2 後ヶ谷戸の青面金剛塔



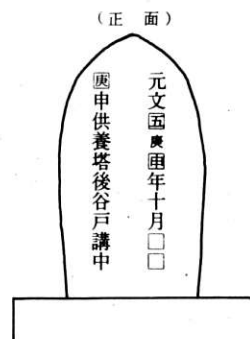
### あいじん山の青面金剛塔（写真3 分布図No.8）

三ツ木の峰にあいじん（愛染）山と呼ばれる山があり、この山中にあたご権現碑、くりから不動、板碑などと共に庚申塔が祀られている。

この庚申塔は山の斜面に建てられており、高さ57cm、幅30cmの舟型である。上部に日月瑞雲を刻み、下部に三猿を配する。中央には青面金剛が浮彫りされており、左二手は剣と矢を握り、右二手は宝輪と弓を持っている。残り二手は胸前で合掌をしている。銘文は塔の右端に「元文 $\square$ 庚 $\square$ 年十月 $\square$ 」左端に「 $\square$ 申供養塔 後谷戸講中」と判読できる。



写真3 あいじん山の青面金剛塔



引又街道の庚申塔（写真4 分布図No.9）

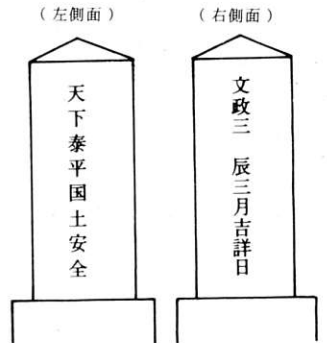
北多摩西部消防署三ツ木出張所前に一基の文字庚申塔が建てられている。この庚申塔は高さ103cm、幅37cmで、角柱状の石の正面には「庚申塔」と大きく彫り刻まれている。

右側面には「文政三庚辰三月吉詳日」、左側面には「天下泰平国土安全」と刻み、また裏面にも「武州多摩郡村山郷三ツ木村峰」と刻まれている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第17番 三ツ木村原の箱根海道榎木塚上 文政三辰年三月三ツ木村峰講中」とあり、この庚申塔が引又街道と三ツ木街道が交差する四辻の榎の塚の上に建てられていたことがわかる。現在、榎は台風で倒れて無く、塚もその形を見ない。わずかに引又街道が昔の面影を残しているのみである。



写真4 引又街道の庚申塔



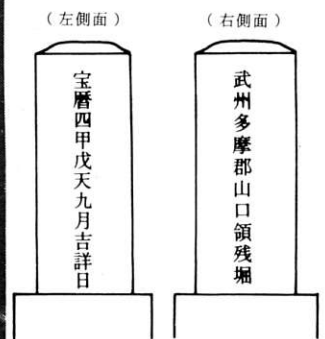
残堀の庚申塔（写真5 分布図No.10）

残堀自治会館裏には、地藏堂と馬頭観音一基と庚申塔二基が安置されているお堂がある。左端の庚申塔は文字庚申で、高さ92cm、幅34cmの角柱状の石の正面に「奉納庚申供養」と刻み、その下に三猿を配している。塔の右側面には「武州多摩郡山口領残堀」以下11名の人名、左側面には「宝暦四甲戌天九月吉詳日」以下9名の人名が刻まれている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」に「第18番 残堀村用水路を渡り直に左へ行下出口 宝暦四戌九月多摩郡山口領残堀」とあることから、昔からこの場所に建っていたものではないことがわかる。元の場所は残堀街道（都道162号線）と江戸街道（別名桜街道）が交差する四辻の角（北西側）で、馬頭観音と並んで建てていたといわれている。



写真5 残堀の庚申塔



残堀の青面金剛塔（写真6 分布図No.11）

残堀自治会館裏のお堂の中に安置されている二基の庚申塔のうち、中央の庚申塔は角柱状の笠付型で、笠部正面には唐裳層（からもこし）様の張出しが見られる。高さ123cm、角柱幅24cmのこの庚申塔は正面上部に日月瑞雲が刻まれ、下部には三猿を配し、中央に邪鬼を踏まえた合掌六手の青面金剛が浮彫りにされている。塔の右側面に「寛保三癸亥十一月吉日 武州多摩郡山口領残堀」と刻んである。百庚申巡礼記には「第19番 同村上の出口道南 寛保三亥十一月施主残堀村」とあり、現在の残堀5丁目69番地付近にあったものである。

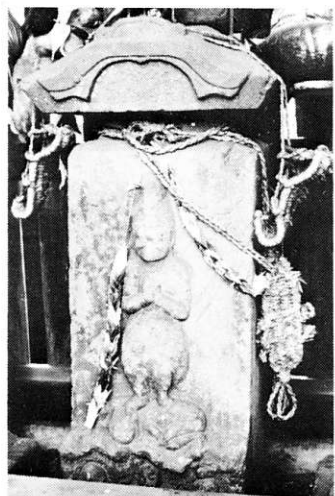
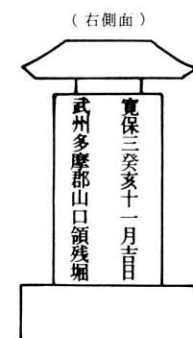


写真6 残堀の青面金剛塔



## 民俗コーナー「棒打ち(ポーチ)」

武蔵村山市は、北側に狭山丘陵を控え、南側には武蔵野台地の広がる緑豊かな街である。

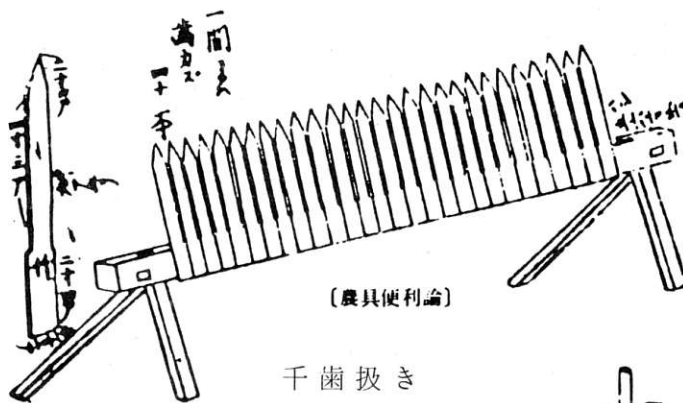
狭山丘陵周辺地域は、この丘陵のもつ保水性によって、湧水も多く、生活用水に事欠かない特質をもっている。このため、武蔵村山市の旧村落は、そのほとんどが狭山丘陵に沿って東西に長く形成されている。また、農耕地は南に拡がりを持ち、土地がらから、畑地であった。水田は湧水源の下に広がる、「谷戸」と呼ばれる湿地部に若干見られる程度であった。

江戸時代の年貢徴収は、米が中心であったが、当時、村山の各村々では、米の代わりに畑作物をお金に換えて「金納」という方法で年貢を納めていた記

録も残されている。

畑作による作物は、江戸時代には大麦や小麦、粟、芋などであり、明治初期になると、特に大麦と小麦の生産量が多くなっている。明治3年に記された史料によると、中藤村の収穫量は、米56石、これに対して麦は2953石(大麦1778石、小麦1175石)とあり、これからも麦作りが主流であったことがうかがえる。

麦類は、人々の貴重な食料として収穫後、「脱穀」という作業を行う。先人の行った脱穀の方法、また現在市内で行なわれている麦の脱穀の方法などをここに紹介する。



### 千歯抜き

明治時代の脱穀は千歯抜き(センバコキ)で麦を抜き、それをクルリボウで脱穀する。このことを棒打ち(ポーチ)と呼ぶ。脱穀した麦実は、トウミやムギブレイなどを使って実と殻をより分ける訳である。この方法は、江戸時代から受継がれてきたものである。



千歯抜き使用例

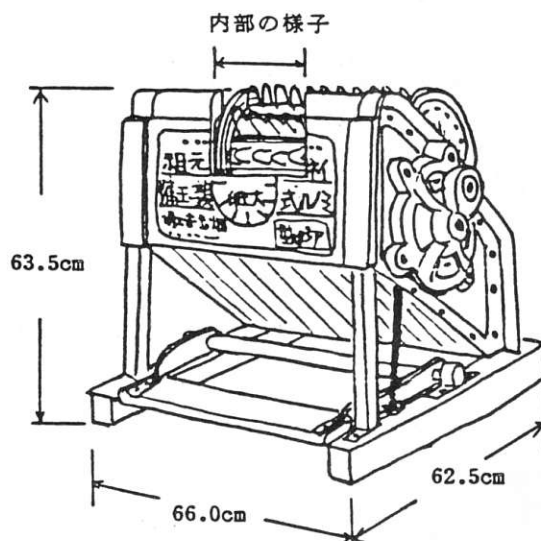


クルリボウ使用例

クルリボウ (農民生活史事典より)

## 足踏脱穀機

その後、大正時代に普及し始めた、足踏脱穀機（アシブミと呼ばれた。）の導入によって、作業の短縮が成され、続いて昭和10年頃石油発動機を用いた動力脱穀機（ハツドウキと呼ばれた。）が共同購入されるようになった。石油発動機は、昭和25年頃になって電動モーターに変わり、この電動モーターの普及により、各家で脱穀機を持つようになったようである。



足踏脱穀機

## 動力脱穀機

動力脱穀機による脱穀作業は、麦扱きと脱穀を同時に行うため、能率的になった。しかし、この脱穀作業自体をいまだに「棒打ち」と呼んでいるのは、古くからの名残りを止めたものとして興味深い。

ここに紹介する脱穀作業は、昭和59年7月に市内中藤（乙幡進宅）で行われた様子を収録したものである。

### 作業行程

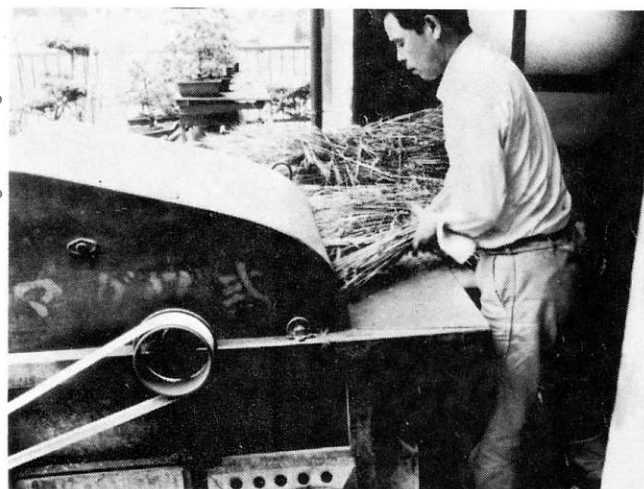
作業を能率よく行うためには、最低3名の人員が必要である。その役割は、脱穀をする者、麦束を渡す者（右写真）、その他の作業をする者とに分けられる。その他の作業とは、麦束の運搬や脱穀機から出る実や麦からを集めたりする事が主なものである。



一連の脱穀作業は「脱穀する者」が中心で、渡された麦束を両手で持って、そのまま脱穀機にかける。その時、麦の束を差し込みながら手先を回転させる（右写真）。この行為を2～3回くり返し、脱穀を終る。

脱穀の終わった麦からは、束ねて畑に持って行き、腐らせて肥料とする。

また、麦実は、晴れた日を見計らって、ムシロに拡げ、ほぼ一日干す。干すことによって保存が効くとともに、甘味が増すとのことであった。



# 写真で見ると

## 今

## と

## 昔

## 写真展から

資料館では、昭和58年6月から市報や社会教育だよりの紙面を活用し、広く市民の所有する写真の提供をお願いしてきております。

この結果、現在まで306点にも及ぶ貴重な写真資料の提供をいただきました。これらの写真の多くは、市内の風景や、建築物の写真ですが、このほか

にも貴重な航空写真が含まれております。

昨年11月、これらの航空写真を整理して、「武蔵村山市の今と昔」と題し、写真展を実施しました。この中から武蔵村山市の移り変わりのわかる2枚の写真を紹介します。

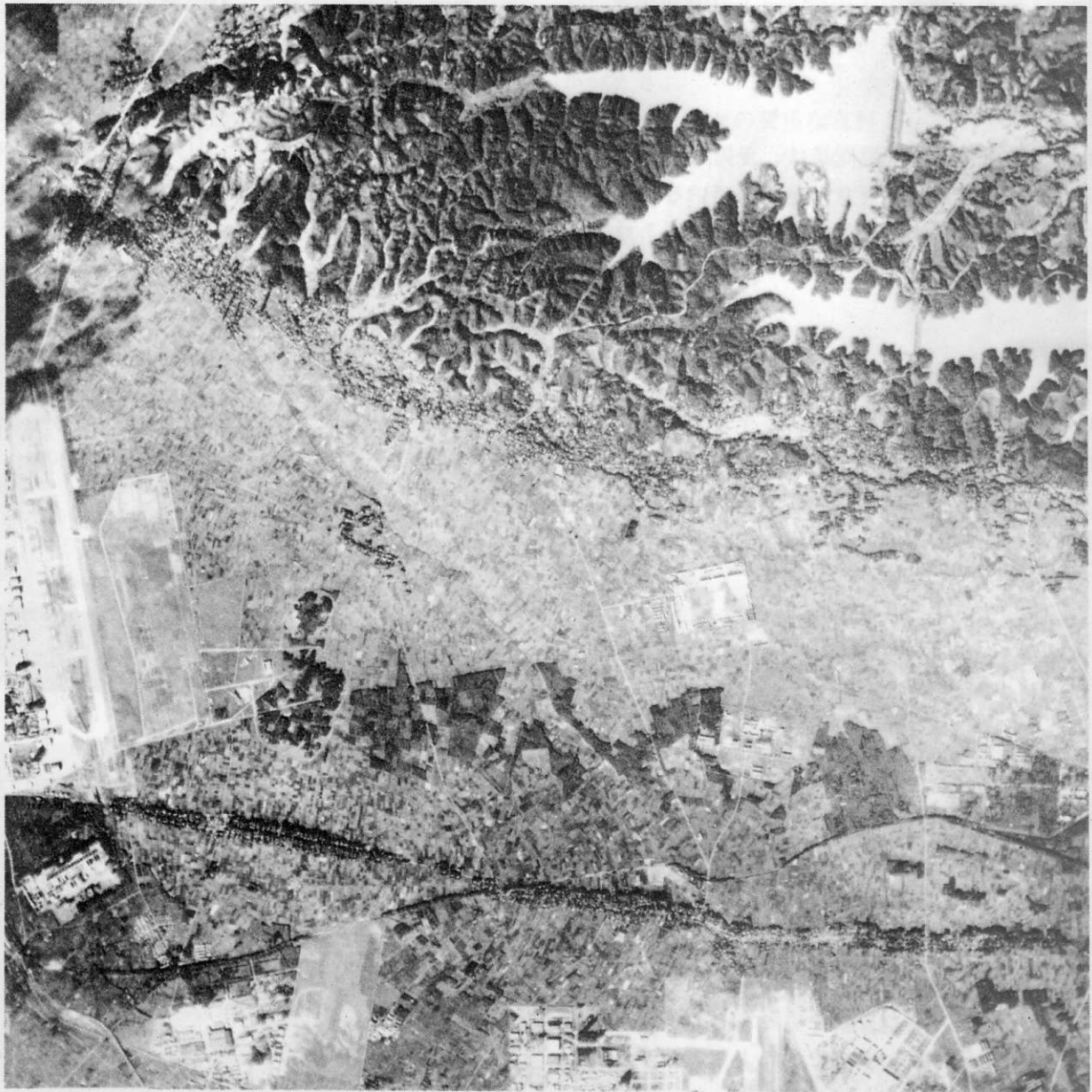


写真 I 武蔵村山市の全域とその周辺  
(昭和22年撮影)

## 写真の解説

### 写真 I

昭和22年、当時の村山村を中心に、撮影された航空写真です。

写真上部の狭山丘陵の一角を眺めると、見事な樹海の中に、狭山湖や多摩湖の湖水面をはっきりと確認することができます。狭山丘陵の裾、青梅街道沿いに目を移すと、当時から、この街道沿いに住宅が密集していたことがよくわかります。また、南側に大きく広がった平坦部は一面畑になっています。

写真をよく見ると、現在当市の文化財に指定されている三本榎の内の2本が、はっきりと確認することができます。

当時の村山村は、人口は1万1千人で、産業別の人口では第一次産業に従事する者が最も多く、農村的色合いが濃い時代であったようです。また、当時の

砂川村に目を移すと、五日市街道沿いに屋敷林と共に、整然とした家並みが見られます。特に玉川上水は緑に覆われ、その流路を明瞭に見つけ出すことができます。

### 写真 II

昭和55年に、武蔵村山市を中心に撮影されたものです。写真Iと比較すると、都営村山団地や三ツ藤住宅、また、市のほぼ中心部を東西に走る、新青梅街道などが見られ、市の様子が一変しています。

人口は5万7千人を数え、大きく広がった家並みや、工場を見ても、市の発展と共に次第にベッドタウン化している様子がよくわかります。

また、市の周辺では、五日市街道や玉川上水も見られますが、特に、西武拝島線も確認することができます。写真Iと比較してよくご覧下さい。



写真 II 武蔵村山市の全域とその周辺  
(昭和55年撮影)

寄贈資料(昭和58年4月1日~昭和59年3月31日)

次の方々より貴重な資料を御寄贈いただきました。  
ありがとうございました。

古川基一氏(中藤3,878-4)

関東大震災写真 11枚

関東大震災絵はがき 16枚

武蔵村山郷土の会

狭山三十三観音朱印色紙 34枚

狭山三十三観音御札 9枚

農作業等写真パネル 66枚

峰岸清二氏(神明2-69-1)

板碑 1点

庄山明氏、中野芳則氏(神明1-28-2他)

錠前 1点

比留間正好氏(残堀2-2-1)

糸おさ 4点

おさ 1点

くるり棒 1点

糸染め機 1点

緯緋返し 1点

ざくり 1点

三條和男氏(三ツ藤1-44-2)

教科書 22冊

荒井奥民氏(残堀5-21)

関東大震災絵はがき 14枚

山田博氏(中藤1-1)

おさ 10点

荒井三男氏(三ツ藤1-58-10)

大礼記念国産振興博覧会絵はがき 5枚

国民の友(雑誌) 1冊

藤井利亮氏(三ツ木1,264)

ふりこみじょれん 1点

とっくり 1点

鍬 1点

蹄鉄 1点

はかり 1点

ばねばかり 1点

俳句掛軸 4巻

俳句教本 8冊

東京百景等絵はがき 83枚

資料館利用状況(昭和58年4月1日~昭和59年3月31日)

年・月	個人計	市内	市外	団体計	市内	市外	視察他	主催事業	合計	開館日数
58・4	1,301人	805人	496人	355人	344人	11人	0人	0人	1,656人	24日
5	1,088	682	406	332	323	9	17	30	1,467	23
6	751	417	334	196	196	0	0	67	1,014	22
7	1,175	780	395	119	22	97	32	35	1,361	23
8	1,786	1,189	597	131	56	75	0	128	2,045	25
9	681	440	241	50	0	50	3	29	763	23
10	807	467	340	131	78	53	0	96	1,034	24
11	638	300	338	375	94	281	0	18	1,031	23
12	544	262	282	0	0	0	0	7	551	22
59・1	555	353	202	13	0	13	17	7	592	22
2	493	295	198	236	236	0	0	6	735	23
3	1,191	757	434	996	666	330	0	0	2,187	25
計	11,010	6,747	4,263	2,934	2,015	919	69	423	14,436	279

日平均	39.5人	24.2人	15.3人	10.5人	7.2人	3.3人	0.2人	1.5人	51.7人	-
月平均	917.5	562.3	355.3	244.5	167.9	76.6	5.8	35.3	1,203	-
比率	76.3%	-	-	20.3%	-	-	0.5%	2.9%	100%	-